

大学での少人数教育を契機とした景観まちづくりの実践*

Practice for Community Design through Small Group Lessons at University*

毛利洋子**・星野裕司***・小林一郎****・永村景子*****

By Youko MOURI**・Yuji HOSHINO***・Ichiro KOBAYASHI****・Keiko NAGAMURA*****

1. はじめに

熊本市から阿蘇に向かう手前に位置する大津町は、加藤清正以来の大津街道の宿場町として栄えた歴史と、阿蘇への眺望や白川という豊かな河川を有した街である。一方、阿蘇に行く途中に通る街、程度のイメージしか一般の人たちに残していない。この現状から、町の活性化と、大津街道の歴史のもとで、街道沿いに点在する町が連携し、点が線として繋がることを目標とした、まちづくりが動き始めていた。

著者らは、大津町の市民からまちづくりに関する相談を受け、まず学部3年生に対する少人数教育の一環として参加することからプロジェクトをスタートさせた。調査から意見交換、成果発表を通じて、市民とのコミュニケーションを深めていった。その結果、講義終了後も市民と協働してサインづくりなどの実践に関わる機会を得た。

このように、互いの関わり方が変化したこと、まちづくりの継続に示唆を与えたことが考えられた。そこで、本稿は、この実践を報告する。また、一連のイベントの関連性に着目し、まちづくりの活動における主体の関わり方を分析する。そして考察から、大津町でのまちづくりの特徴を示すことを目的とする。特徴を示すことが、住民の「主体的な活動」や「活動の継続」、「多様な担い手の参画」といった、まちづくりにおける重要な課題に対する、より具体的な示唆に繋がることを目指す。

まちづくり活動は、各地で行われ、事例の報告や研究も多く行われている。事例報告として関連する研究には、登根ら¹⁾による、大学の参画に関する学生の専門家教育に着目した研究、脇田ら²⁾や、村田ら³⁾による、まちづくりに関する人材育成に着目した研究がある。一方、活動の成果や展開に着目した研究として、坂野ら⁴⁾のワークショ

ップなどイベントでの成果に着目した研究や、野嶋ら⁵⁾の展開の要因や経緯に着目した研究に関連する。

以上の既往研究に対し、本稿は、筆者らが実践した活動の報告を中心としつつも、それが可能となった背景や、その後の展開に対しても考察を行うものである。この点で、これらの既往研究とは大きく異なるものである。

2. 活動の概要

(1) 大津町について

大津町は熊本市の東方約19km、阿蘇山との中間に位置しており、国道57号（長崎～雲仙～大分）と国道325号（久留米～阿蘇～延岡）が縦・横断し、熊本空港、九州縦貫自動車道熊本ICに近く、交通条件は恵まれている。また、人口は約28,000人である。

歴史的に見ると、天正15（1588）年加藤清正が肥後の領主として入国、大津上井手、下井手の開さくに着手し、没後、細川氏により完成し、一大穀倉地帯となった。江戸期には細川藩参勤交代の宿場町となり、肥後と豊後を結ぶ豊後街道の要衝として栄え、近隣52村余りを統轄する藩役所大津手永会所が設けられ、政治・経済・文化の中心となっていた。



図－1 大津町の位置

(2) 社会基盤設計演習について

熊本大学では、景観デザインやまちづくりなどの教育に関して、「歴史と景観」（観察する、1年後期）、「空間設計論」（対話する、2年前期）、「構造設計論」（工夫する、2年後期）、そして、「社会基盤設計演習」（創造する、3年前期）を連携させることによって段階的に行っている（図－2）。最終段階である「社会基盤設計

*キーワード：景観、公園・緑地、まちづくり、教育

**学生員、工修、熊本大学大学院自然科学研究科

（熊本市黒髪2-39-1、TEL096-342-3602、

FAX096-342-3507）

***正員、博士（工）、熊本大学大学院自然科学研究科

****正員、工博、熊本大学大学院自然科学研究科

*****正員、工修、株式会社 文化財保存計画協会

演習」は、多グループで行う少人数教育であり、筆者らのグループには8名の学生が参加した。筆者らは、学生に現実の課題を与え、その成果を市民にプレゼンテーションするという社会的な活動を学生に提供することを、この講義の目標としている。2005年度のテーマが「大津町まちづくり計画」であり、過去2年は、04年度に小国町に残る廃線跡を活用した「宮原線跡活用プロジェクト」、03年度が「三角海峡活用プロジェクト」である。

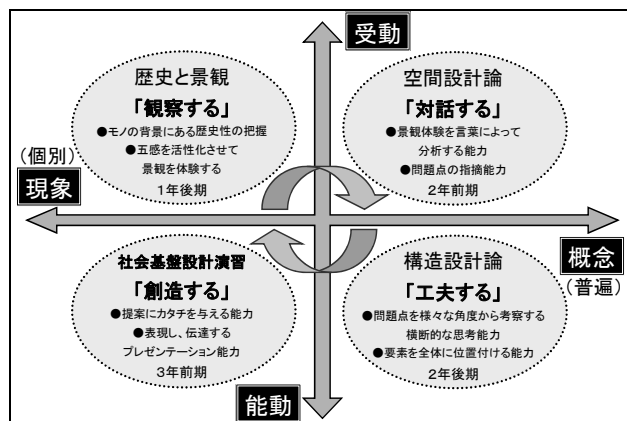


図-2 社会基盤設計演習の位置づけ

(3) 活動の流れ

本稿で報告する活動の流れを表-1に示す。活動を、まちの活動、大学での少人数教育としての活動、まちと大学の協働活動、の3つに分類した。互いに関わった時期のズレ、活動内容を明確にした。この活動には4つの時期がある。すなわち、地元住民の一人（土木コンサルタントの経営者）が、町道の景観整備業務を契機に、まちづくりのアイデアをはぐくむ時期Ⅰ、大学での少人数教育「社会基盤設計演習」を展開する時期Ⅱ、大学と住民が協力して、街中のサインを制作する時期Ⅲ、まちの現在の活動を示す時期Ⅳである。

最初の時期Ⅰにおいて大切なことは、台風によって倒れた杉を、大津町商工会が熊本県から譲り受けたことであろう。この杉は、豊後街道の杉並木として植えられたもので、樹齢は400年以上と推定される。このような具体的なモチーフを得られたことが、活動が持続する一つの要因になったと考えられる。

次の時期Ⅱに移る契機には、住民から筆者らへのまちづくりに関する相談があった。そこで筆者らは、前述した「社会基盤設計演習」の課題として取り組むこととした。この理由は、講義の実績があると同時に当年度のテーマを探していたこと、まちづくりにおいては住民やアドバイザーが忌憚なく議論できる場を作ることが肝要であり、講義の一環としての活動は、その場づくりに最適であると判断したことである。具体的な内容は次章で述べる。

その後、講義が終了してもこの活動は終わらず、先の木材を活用したサイン製作の時期Ⅲへと展開していく。それらについては4章に詳述するが、大学とまちによる協働の活動が展開された。また、サイン製作後も、まちづくりの活動は継続しており、時期Ⅳについて5章に詳述する。

表-1 活動スケジュール

年月日	まちの活動 大津町(地元住民)	まちと大学の協働活動	少人数教育の活動 社会基盤設計演習
2004.6月	町道室塘町線景観整備設計 (～10月末)		
9.07	台風18号により大津街道の杉が倒れ、再利用可能な倒木杉を大津商工会が譲り受ける。		
10月	町道室塘町線上井手沿い防護策提案		
10.29	豊後街道地域振興会発足		
2005.3月	町道室塘町線上井手沿い防護策施工		
3.15	「川を活かした下町のまちづくり」企画提出		
3.27	第1回大津町現地調査、関係者初顔合わせ		
4.22			演習授業開始
23			現地調査
5.01	大津ものづくり会発足		
13		現地調査結果分析、大津町情報収集	
27		対象地決定	
6月		方向性の検討、町の様子分析	
6.25	意見交換会(大津愛唱歌披露コンサート内で、大津町分析発表)		
7.01		まちづくり提案の方向性決定	
08		提案に向けた再調査	
9.20		模型製作開始	
30		現況模型完成	
10.03		まちづくり提案検討開始	
10		HP完成	
21	第1回WS(現況模型説明、意見交換会)		
29		パネル、提案模型完成	
30		工学部祭(学内で成果報告会)	
11.09		まちづくり提案資料作成開始	
18	第2回WS(まちづくり提案発表、社会基盤設計演習終了)		
12.12	提案模型等展示(大津町役場、～22日)		
16	サイン用杉材視察		
16	大津町懇談会(九州建コン主催)		
2006.1.17	豊後街道視察		
2.25	現地調査		
3.04	サイン形状打合せ		
4.09	サイン製作開始 木材の成形		
4.12	サイン製作 塗装		
4.22	サイン製作完了		
4.23	サイン現場設置		
4.23	「つつじ祭り」会場内に模型やサインを展示 (アンケート実施)		
10.28	豊後街道スタンプラリー開催～H19.03.15		
	豊後街道地域振興フェスタin鶴崎(大分)		
2007.2月	こでかけまっぷ改良編製作中		
11月	豊後街道地域振興会によるイベントin熊本		

3. 社会基盤設計演習での活動

表－1 からわかるように、時期Ⅱの「社会基盤設計演習」での活動も大きく3期に分かれる。調査の時期、提案準備の時期、提案の時期である。まず調査の時期では、阿蘇の入口という地理的な条件から知名度はあるが、大津町の魅力そのものに関しては何も知らないという問題点が確認され、それを発見するために入念な現地調査が繰り返された。これが可能となったのは、大学と大津町が車で30分という近距離にあるということが大きい。調査の成果は、2005年6月25日の意見交換会で発表された（写真－1）。これは「大津町の愛唱歌を水車物語で聞く小さなコンサート」というイベントの前座として催されたものである。この会によって住民の声を聞いた学生たちは、対象を絞り具体的な提案に入っていく。選ばれた対象地は、住民の意向を尊重し、街角広場を中心としたまちなかの提案と、町の南部を流れる白川に面した下町という地区の河川緑地の提案であった。この時期は夏休みを挟んでいるために、作業の進捗が遅れたが、提案をまとめる前に再度、現況模型を囲んでのワークショップ（以下WS）を開催し、住民の意見を収集している（写真－2）。その後、提案内容を詰め、模型などの表現を使用して第2回WSに提示した（写真－3）。

このWSにおいて、最も住民の関心呼んだ提案は、街角広場との関連で示した「こでかけまっぷ」と、それに伴う通りの名付けである（図－3）。これは、大津町の街中を活用する方策として、ちょっとしたお出かけという意味の「こでかけ」というテーマを設定し、そのこでかけルートおよび、それを構成するいくつかの道に名前をつけるという提案である。この提案が関心呼んだ理由を考察すると、模型で提示したような具体的な空間は、様々な問題点に議論が集中するが、通りに愛称を付けるという行為は、住民においても地域の魅力や歴史を再発見させる契機ともなり、また、住民が行政に頼らず行える活動として認識されたからではないかと考えられる。



図－3 こでかけまっぷ

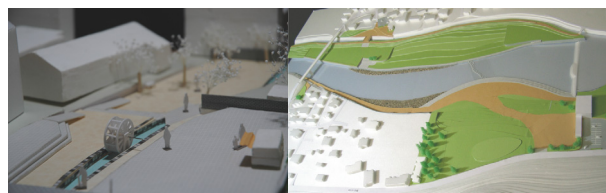
また、まちのお祭りである、つつじ祭りにおいても、通りの名付けコーナーを設置したが、写真－4のように、住民から多数の意見が寄せられた。



写真－1 意見交換会の様子



写真－2 第1回WSの様子



写真－3 街角広場・河川緑地の提案模型



写真－4 通りの名付けコーナーの様子

4. サインづくりへの展開

社会基盤設計演習での活動は、2005年11月に終了したが、その後も大津町役場での提案模型等の展示（12月12～22日）や九州建設コンサルタント協会主催の大津町懇談会（16日）の開催など、まちづくり活動は継続する。ここから具体化していくのがサインづくりである。これは、社会基盤設計演習の成果である通りの名付け活動と、前述した倒木のリサイクル活動を融合させたものである。活動体制は、時期Ⅱ中に住民が発足させた大津ものづくり会が全体のコーディネートを行い、筆者らが所属する研究室がデザインを、大津町商工会が資金の援助を、加工や組立作業の支援を熊本県建築士会東支部が行うというものであった。また、制作作業には、少人数教育に参加した学生が、ボランティアであたっている。筆者らが、サインのデザインにおいてテーマとした点を以下に示す。

- a) 樹齢400年以上である迫力を、できるだけ素直に表現すること
- b) リサイクル材であり、かつ、作業もボランティアであることから、できるだけ贅沢な表現を行うこと
- c) 通りのサインとして機能するだけでなく、掲示板としてや、花を飾るなど、住民が使い愛着を持つことができるものとする

以上の考え方にに基づき、提案した形状は、3枚の板を三角形に組み合わせ、ソーラーパネルによって内部に照明を組み込んだものと、2枚の板をずらして立て、前面の板には、丸い穴を空けるなどの遊びを施した2種類である。スタディ図を図-4に示す。このようなデザイン案に基づき、接続のディテールなど建築士会のアドバイスによって、実際に制作しながら決定していった（写真-5）。結局、三角柱タイプを1基、2枚板タイプを2基作成し、2006年4月23日に開催された大津町でのつつじ祭に展示及び現場設置が行われた（写真-6、7）。

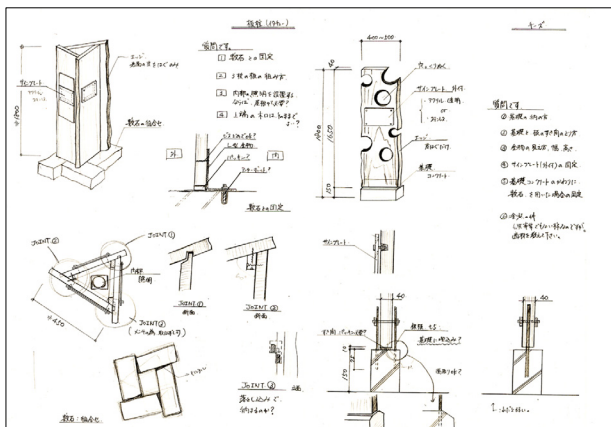


図-4 サインのスタディ



写真-5 サイン製作の様子



写真-6 つつじ祭りでの展示の様子



写真-7 現場に設置した様子

この活動を考察すると、重要な点は3点ある。一つ目は、ここから大津町商工会の積極的な参加が見られるようになったことである。社会基盤設計演習の活動時には、大津町役場と商工会はオブザーバー的な参加だったが、サインづくりから商工会が資金援助などのバックアップを行うようになった。これは、この活動を円滑に進めるためにも必要なことである。しかし、それ以上に、教育からスタートした活動が、まちづくりにより熱心な住民の発掘・定着につながり、地元へ根付いた広がりのあるものになる契機となったことが重要であると考えられる。

二つ目は、サイン設置の場所についてである。写真-7は、この活動の契機となった町道室塘町線景観整備によって実現された広場に設置した写真である。このような場所が、サイン設置には最適であると考えられるが、実際このような場所は少数である。これはすなわち、住民が愛着を持って、かつ目につくような小さな場所（街のスキマ）が、現在の都市から失われている現象の一つだと考えられよう。住民主体のまちづくりの、一つのアプローチとして、このような魅力的なスキマを探していくことが有効なのではないだろうか。

三つ目に、倒木を用いたサイン製作は協働製作として適度な作業量であった。短期間で完成でき、製作に関わることで人のつながりが生じる。また、等身大というスケールが、身近な存在として、より愛着を持たせた。

5. 現在のまちの動き

(1) 現在のまちづくりの活動

サイン製作後も、まちづくりの活動は継続しており、ヒアリングや情報収集の結果から、その後の活動内容を2章に示した表-1の時期Ⅳに示す。表-1に示した活動とそれを支える表面下での活動が捉えられ以下に説明する。

表-1の時期Ⅳに示した活動は2種類に分けられる。1つは、互いの延長上にあり、九州の中部を横断する熊本県側の大津街道沿いの町と、大分県側の豊後街道沿いの町が協力し、線的なつながりを持つ取り組みである。大津町のまちづくりが動き出したと同時に、平成18年豊後街道地域振興会も発足し、継続的な活動が行われている。その一環として、スタンプラリーが平成18年10月末から6ヶ月間で開催中である（図-5）。この取り組みでは、往来手形として、サイン製作時に発生した、派材から転じた小物も用いられている。平成19年11月には、イベントが企画されており、子供を中心とした場を設け、同時に大人が集まる場を企画中である。

もう1つは、大津町での活動である。大津町のまちづくりとしては、こでかけまっぷ改良版を製作中である。また、サイン製作時の派材からは、携帯ストラップも製作されつつある。つつじ祭りでの展示会での展示物、サイン本体1基は、まちのイベント等で、展示を繰り返しており、住民に対し、まちづくりの認知度、まちへの関心の向上のため、現在でも活用されている。また、製作に関わった学生も、その後、様子が気になり現地に足を運んだり、現地を経由することもあるようだ。

一方で、これらの活動を支える表面下の活動がある。予算も必要であり、県の支援金等に対する情報収集、プレゼンテーションも行っている。しかし、まちづくりの活動に対し、共通した認識が得られず難しい現状もある。

(2) 継続の背景

時期Ⅲから時期Ⅳへ、活動が継続した背景に関して考察を行う。まちづくり活動が継続されているが、活動の企画や運営に関しては、大津町在住で、まちづくりに熱心なキーパーソンの力が大きいことが、ヒアリングから伺えた。

一方で、活動には、住民の参加が欠かせない。そこで、住民のまちづくりに対する関心に着目した。2章の表-1の時期Ⅲに示したつつじ祭で、学生のまちづくり活動への参加および制作したサインに関して住民にアンケートを行い115名の回答を得た（表-2,3,4,5、図-6）。115名のうち、WSへの参加経験が無い人が87%を占める（表-5）。アンケート結果以前に、アンケートへの参加が、まちづくり活動への関心の高さを示している。また、図-6からは、学生の関わり、サイン製作に関して、おおよそ好印象をもたれたことがわかる。そして図-6のQ3からは、この場を通して過半数を超える人達に、まちづくり活動に参加する関心を持って頂けたことがわかる。

これらから、熱心で活動を起す住民（キーパーソン）、まちづくりに関連した場に積極的に集まり、まちづくりに関心をもつ住民、イベント時に気が付けば足を止め、その活動の存在を知る程度の関心を持つ住民、といった大きく3段階の住民が、このまちのまちづくりを支えている現状がうかがえる。



図-5 スタンプラリーの広告

表－2 アンケート回答者の性別

性別	男性	女性	合計
	35	80	115
	30%	70%	100%

表－5 アンケート回答者のWS への参加経験

WS への参加経験	はい	いいえ	無回答	合計
	4	99	12	115
	3%	87%	10%	100%

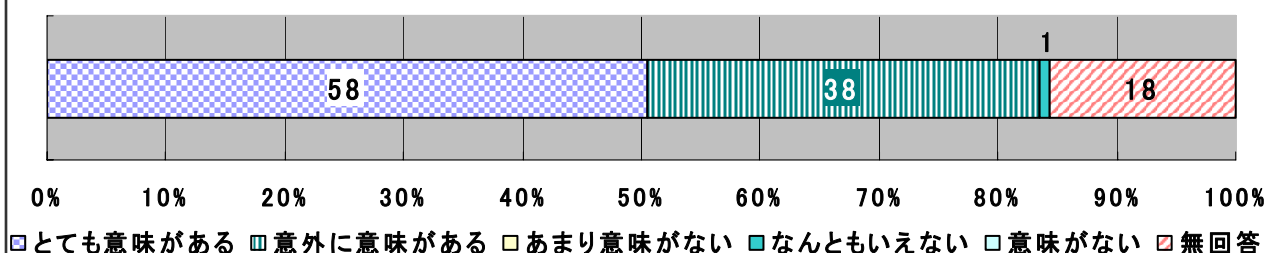
表－3 アンケート回答者の年齢分布

年齢	10代	20代	30代	40代	50代	60代以上	無回答	合計
	2	12	32	20	25	24	1	115
	2%	10%	28%	17%	21%	21%	1%	100%

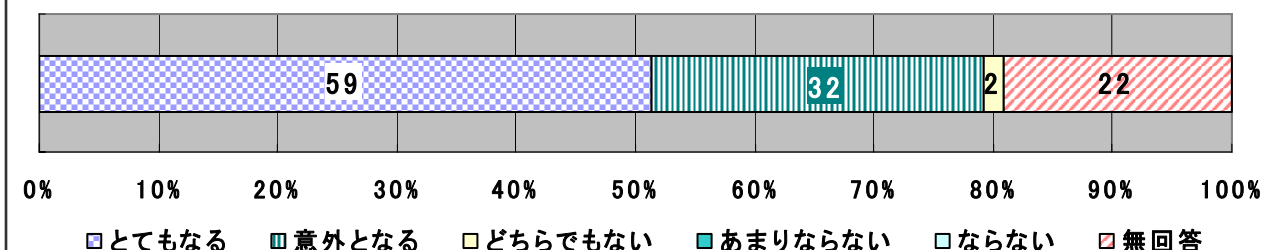
表－4 アンケート回答者の大津町居住年数分布

居住年数	5年未満	10年未満	20年未満	30年未満	30年以上	無回答	合計
	31	19	9	10	28	18	115
	27%	17%	8%	9%	24%	16%	100%

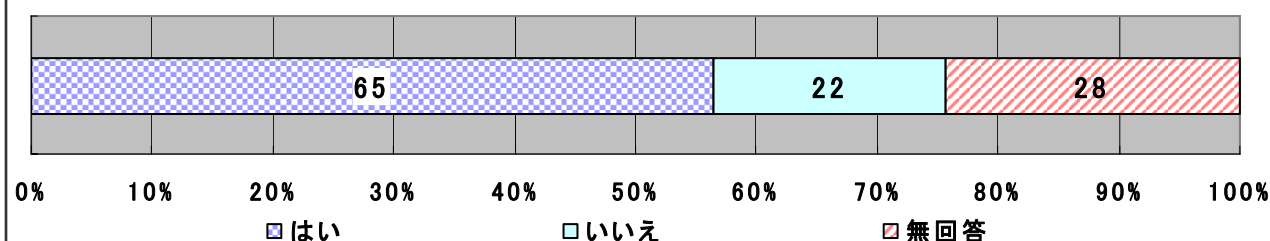
Q1. 学生がまちづくりに関して行った提案・発表を聞くことが、まちづくりに生かせると思いますか？



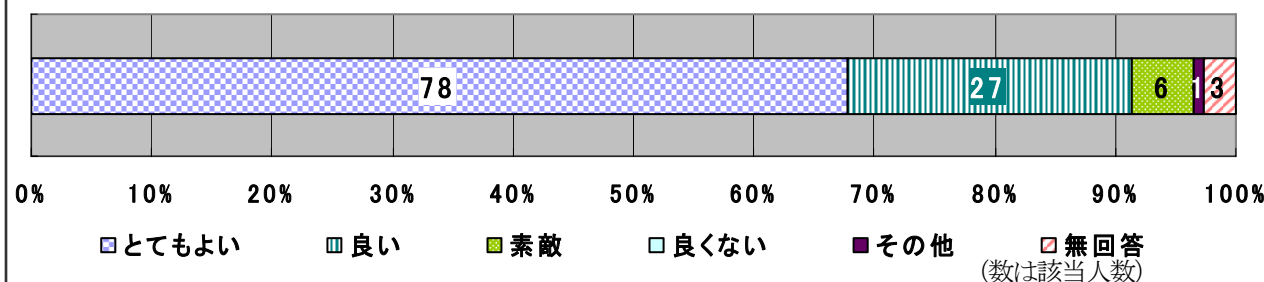
Q2. まちづくりの活力になると思いますか？



Q3. この展示を見て自分も参加してみたいと少しでも思いましたか？



Q4. 使用した材料は、大津街道の杉で、台風で倒れたものを再利用してますが、どう思いますか？



図－6 アンケート結果

6. 考察

(1) 関わり方の図式化

この章では、報告してきた活動全体について、主体の関わり方の視点から考察を行いたい。図-7に、まちづくりの活動の流れと、まちと大学の関わりを図式化した。

横方向に、関わる人を住民、キーパーソン、教員、学生の4つを表現し、縦軸に、時間の流れを2章に示した表-1の時期Ⅰ～Ⅳと対応させて表現した。また少人数教育や、後の活動で得られた成果との関係を破線で示す。さらに、支援する立場の人を企画者として示した。企画者には教員やキーパーソンが該当した。また、支援を受け、影響され、育てられる立場の人を主体として示した。主体には、学生や住民が該当した。

図-7から、互いに支援しあう関係が、主体を変えながら、時期によって、ずれていく様子がわかる。このような互いの関わり合いがずれていった理由に着目することで、活動の展開を考察する。また、各時期の成果との関係である破線に着目することで、まちづくりの継続を考察する。

(2) 関わり方の変化とその理由

まず、時期Ⅱでは、学生に対する広義の教育という形態を取り、「ひとづくり」の段階である。いわば第3者的な学生が教育対象であったことが、住民の主体的な参加を自然に促す要因となり、議論する場として機能していたことが考えられる。そのことが、教員と住民の支援のもと学生が教育される関係として捉えられた。

次の、時代Ⅲでは、サインという「ものづくり」の段階となる。ここでは、特にデザイン検討以降は、住民が中心となって製作を進め、学生がボランティアで支援する関わり方へと変化する。住民であるプロの人たちの協力が加わり、短期間で製作できたこと、人間サイズの形状で、親しみやすさを与えたことが、協働で取り組みやすい題材となり、人を動かした理由として考えられる。

現在の活動である時代Ⅳでは、キーパーソンを中心に活動が企画されている。これまでの活動で、関心を高めてきた住民が、活動を協力的に支援する側へ移行しつつある現状が考えられる。このような住民の関わりを含め、新たな主体を模索しつつ展開していくことが考えられる。

このように、主体を変え、互いの関係が変化する場を得ていくことが「まちづくり」の展開として考えられる。

(3) 継続との関係性

図-7で、破線を追ってみると、前の活動の成果が、次の活動の契機となっていた様子がわかる。この流れから、まちづくりの継続について考察する。

時期Ⅲにおいて、新たなまちの活動であるサイン製作

が起こる。この契機は、少人数教育の成果（こでかけまっぷ）にある。台風による倒木の木材が存在したことも大きな理由だが、サインという形を与えたことから、演習後のまちの活動に繋がっていることが読み取れる。さらに、このサイン製作は、時期Ⅳにおいても、小物（往来手形、ストラップ）としても付加価値を与え、まちのイベントなどでは、掲示物やサイン本体を展示するなど活用されている。

このように、互いの関わりの中で主体が変化し、成果が契機として捉えられた背景には、まちづくりの目標が明確であり、まちづくりのある段階として位置付けられていたことが大きい。図-7において、この根底にあるまちづくりの流れを太い矢印で示す。この表現で各時期での活動が単発的ではなく、連携していく様子が読み取れるだろう。このことが、図-7の破線矢印で示したように、学生が継続して関わることに繋がった。

一方で、ヒアリングから「間をあけすぎない展開の必要性を、現場で感じる事が継続に繋がる」という様な表現が得られた。時期を追った図-7の構成からも、まちづくりの展開にテンポがあることがわかる。ヒアリングで得られた現場での実感と、図-7に表現された活動のテンポには、高い相関性があり、そのテンポの実現が、活動の継続につながる1つの要因と考えられる。

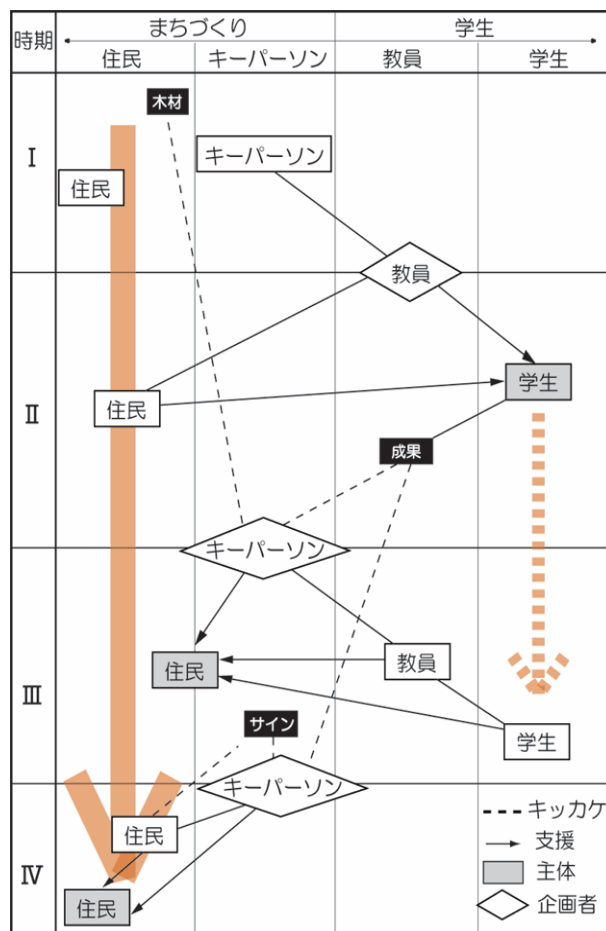


図-7 活動の流れと人の関わり

(4) まとめ

前節までの内容から、最後に、本稿で対象となった大津町のまちづくりから得られた特徴をまとめる。

- 1) 少人数教育を契機とし、企画者と主体の関係を、ずらしながら関わったことが、その後の実践へ繋がりがやすい状態を作った。
- 2) 少人数教育の成果が、契機として捉えられたことで、まちづくり活動の継続を後押しした。
- 3) まちづくりの展開の必要性が、現場から感じ取られ、活動にテンポを生じさせていた。これが、継続に繋がっていた。

主体を巻き込み、主体をずらしながら展開していくまちづくりの様子を示したが、新たな展開では、主体を模索しながら進むことが考えられる。本稿では、教育との関連から学生や住民がその対象になった。しかし、今後、または他事例では、主体には専門家、企業なども考えられる。このような新たな主体の巻き込みと共に、関わり方が変化していく場の継続が、町の活性化を導くと考えられる。

謝辞

本稿をまとめるにあたって、「大津ものづくりの会」代表の中村秀樹氏には、ヒアリング、資料提供など、大変お世話になりました。心より御礼申し上げます。

参考文献

- 1) 登根哲生・嘉名光市・姥浦道生・赤崎弘平：都心のまちづくり団体の抱える課題からみた大学の都心まちづくりへの参画の意義について-大阪船場の取り組みと他地域との比較を通じて-，都市計画論文集，No. 41-3, pp. 343-348, 2006
- 2) 脇田祥尚・黒谷靖雄・田中隆一：参加のまちづくりの学習プログラムに関する研究-松江まちづくり塾を事例として-，日本都市計画学会学術研究論文集，No. 37, pp. 871-876, 2002
- 3) 村田香織・吉村輝彦・渡辺俊一：台湾におけるまちづくりの人材育成・活動支援システムの特徴及び課題 -「社区营造センター」を事例として-，都市計画論文集，No. 40-3, pp. 541-546, 2005
- 4) 坂野容子・饗庭伸・佐藤滋：既成市街地のまちづくりに関する一考察 -ワークショップの展開と個人の意識変化を分析する方法論について-，日本都市計画学会学術研究論文集，No. 35, pp. 13-18, 2000
- 5) 野嶋慎二・松元清悟：まちづくり市民組織の発足と展開のプロセスに関する研究 -長浜市中心市街地の事例-，日本都市計画学会学術研究論文集，No. 36, pp. 7-12, 2001

大学での少人数教育を契機とした景観まちづくりの実践*

毛利洋子**・星野裕司***・小林一郎****・永村景子*****

本論は、まちづくりの活動の現場で、大学の少人数教育を行った報告と考察である。対象となる現場は、熊本市から阿蘇へ向かう手前に位置する大津町である。加藤清正以来の大津街道の宿場町として栄えた歴史と、阿蘇の眺望や白川という豊かな河川を有した街である。この町では、活性化に向けたまちづくりが、熱心な住民のもと動き始めていた。このような町に受け入れられた少人数教育の経過を報告し、大学と住民の関わり方、その変化を図式化して考察する。また当時の様子や、継続する活動に対するヒアリングも含めて考察した。以上から、本論は、まちづくりと大学での少人数教育の関わり方、まちづくりの継続への関係性を分析するものである。

Practice for Community Design through Small Group Lessons at University*

By Youko MOURI**・Yuji HOSHINO***・Ichiro KOBAYASHI****・Keiko NAGAMURA*****

In this paper, I report and consider the contents of performed small group lessons at university, in the town wrestles with activation of a town. The object place is Otsu. There is the town on this side that leaves from Kumamoto-city for Aso. Otsu wrestles with activation of a town. This small group lessons at university was accepted by this town. In this article, I report the contents. I illustrate university education and relations of inhabitants. And I consider the change. Furthermore, I consider continuation of activity from a then state and listening comprehension.
